

飛行ロボ 誰よりも遠くへ

山県市で学生大会、5チーム競う



勢いよく飛び立つ飛行ロボット
＝山県市高木、市総合体育館

岐阜大Bが優勝

学生が製作した飛行ロボットの飛距離を競う大会「東海クライマックスシリーズ」が、山県市高木の市総合体育館で開かれた。岐阜大と名古屋大、中日本航空専門学校(関市)の計5チームが細部まで調節した機体の性能を比べ合い、岐阜大Bチームがほぼ同じ条件で競った昨年の優勝チームより飛距離を15メートルほど伸ばして優勝した。

(松橋靖明)

競い合うことで学びを深めてもらおうと、東海国立大学機構航空宇宙生産技術開発センターが毎年開いており、5回目。両大の予選をそれぞれ勝ち上がった4チームと、今年から加わった同専門学校の学生約20人が参加した。

飛行ロボットに動力源はなく、ゴムの力で発射。機体の向きや傾きをマイコンが検知し、翼の角度を自

動で調節する。材質や翼の形、軽さや丈夫さ、飛行の安定感のほか、送風機による妨害をどう克服するかなどが勝負どころで、岐阜大の伊藤和晃教授は「実際のものづくりのように、複合的な知識を使って課題に立ち向かう経験が重要」と話す。

招待されたのはなぞの北幼稚園(山県市高富)の園児や関係者ら約200人が見守る中、機体は勢いよく飛行。57・5メートルを飛ばして優勝した岐阜大Bチームの藤原凜太郎さん(21)は「翼のカーブが設計通りになるように工夫して成形した」とこだわりを語り、水野誠也さん(22)は「リハーサルでトラブルがあり心配だったけど、無事に飛んでくれて良かった」と喜びをかみしめた。

初参加の同専門学校は、手に入りやすく便利な素材として和紙を用いた機体で挑戦。佐藤綾真さん(21)は「機体に合ったプログラム調整ができた。真つすぐ飛んでくれてうれしかった」と笑顔を見せた。